

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 7 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720117

研究課題名（和文）

ロビンゾナーデと自然科学を統合した啓蒙主義文学としての『世界周航記』研究

研究課題名（英文） Research on *Reise um die Welt (Voyage around the World)* as literature of the Enlightenment integrating a Robinson Crusoe style novel with natural science

研究代表者

森 貴史 (MORI TAKASHI)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：10318743

研究成果の概要（和文）：イギリス海軍ジェームズ・クックの第2次世界航海に同行したゲオルク・フォルスターは、その知見を『世界周航記』（1778-80）として出版した。この航海記は、現代の視点で通常の航海記文学として読めば、クックの航海を年代記的に記しているにもかかわらず、非常に難解なカオス的な構造をもった航海記であるとの仮説に立脚し、この著作を「文学テキスト」および「自然科学と文化史のデータベース」としての両面から分析した論考を、ドイツで上梓した。

研究成果の概要（英文）：Georg Forster's *Reise um die Welt (Voyage around the World)*, an 18th century German publication of his travels around the world, was analysed from two points of view: one as 'literary text' and the other as 'database of natural science and cultural history'. This work was subsequently published in Germany.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：探検旅行記、博物学、自然科学、ロビンゾナーデ、啓蒙主義文学

1. 研究開始当初の背景

本研究の主要研究対象であるゲオルク・フォルスターの『世界周航記』（1778-80）は、ドイツではクック自身の航海記よりも読まれたといわれるほど影響力をもっていた。

しかし、Akademie 版全集で全2巻900頁以上のボリュームをもつこの著作を、現代の視点で通常の航海記文学として読めば、クックの第2次世界航海全体を年代記的に記し

ているにもかかわらず、非常に読みにくいカオス的な構造をもった航海記であるとの仮説に立脚した。

『世界周航記』が構造的に内包する複雑さのひとつとして、航海記中にしばしば挿入される、自然科学に関する記述が挙げられる。しかも、これらの記述群は18世紀後期で重要視されたさまざまな自然科学的要素に関する分析をシステムティックに記述するの

ではなく、関連するトピックが出てくるとにアトランダムに記載していくスタイルが取られていて、そのけっして少なくはないボリュームが「出来事」としての *Geschichte* (歴史/物語) の叙述を頻繁に断絶することが、現在での〈読みにくさ〉の要因のひとつであるだろう。

とはいえ、その自然科学の考察は 18 世紀の学術領域では重要な部分を占めるものだと考える。フォルスターを当時の自然科学の視点から分析した優れた研究では、Tanja van Hoorn: *Dem Leibe abgelesen*. (Tübingen: Niemeyer, 2004) があるが、これはおもに文化人類学と解剖学の分野を中心にしたものであるうえに、『世界周航記』はこの問題のひとつの周縁としてしか位置づけられていない。

しかし、本研究では、文化人類学と解剖学のほか、航海術、天文学、経度測定、地理学、地図学、博物学といった自然科学関連のテーマにくわえて、自然科学と密接に関連する文化史的テーマ、食餌療法、瘴気と嗅覚、風景論の視点からも、『世界周航記』各所に挿入される自然科学の記述を、18 世紀後半の自然科学と文化史とのコンテキストとの関連で分析し、その時代性と意義を吟味する必要があった。

2. 研究の目的

このテキストの複雑な構造に対して、18 世紀後期という同時代の自然科学および文化史コンテキストと関連づけることで比較および分析をおこないつつ、「航海記」という文学ジャンルとしてもテキスト分析をおこなった。いわば、『世界周航記』が〈読みにくい〉ということの原因を究明するのが、本研究の目的である。

『世界周航記』はこれまでノンフィクションのドイツ古典主義紀行文学のジャンルのなかにも固定されてきたが、実際には、四方田犬彦『空想旅行の修辞学』(七月堂、1996 年) で言及されているとおり、18 世紀の航海記はフィクションとノンフィクションの境界がきわめて曖昧であり、リアルな航海記とフィクショナルな航海記とが、たがいのテキストのスタイルと構造にインターテクスチ

ュアル(間テクスト的)に相互作用していたのである。

たとえば、ロビンズナーデの始祖であるデフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719-20) がウッズ・ロジャーズの『世界巡航記』(1712) に記された漂流者アレクザンダー・セルカークの記述を下敷きにしている事実は、18 世紀のフィクションとノンフィクションの航海記との関係性をすでに原理的に内包していたといえる。

フォルスターのテキストもまた、このロビンズナーデのインターテクスチュアリティの系譜に位置するものであって、この作用圏のなかで『世界周航記』を捕捉する必要がある。つまり、かれのテキストの〈読みにくさ〉のもうひとつの要因は、当時の航海記の叙述のスタイルを踏襲していたことと同時に、かれの友人にして弟子である A. v. フンボルトが『コスモス』(1845-62) で指摘しているように、フォルスターが散文における新しい叙述の方法を試みていたことにあるだろう。

したがって、クックやブーガンヴィルのリアルな航海記はもちろん、『ロビンソン・クルーソー』を嚆矢とし、カンペの『ロビンソン・ジュニア』(1779-80)、ウィースの『スイスのロビンソン』(1812) などの代表的なロビンズナーデを中心に、その叙述方法と記述の内容を比較分析することで、フォルスターの『世界周航記』の影響と特質を規定しながら、ロビンズナーデの系譜にしっかりと位置づけることが、本研究のもうひとつの目的となる。

『世界周航記』のテキスト構造の複雑さとは、その要因のひとつが本文中に煩瑣に挿入される自然科学と文化史の領域に属する記述群と、もうひとつはロビンズナーデとしての *Geschichte* (歴史/物語) の叙述方法にあるということである。

このふたつの要因の分析には当然ながら、フォルスターの歴史観・世界観の分析も含まれるが、とくに上記の 2 点を総体的に分析することによって、クックの航海の科学的方法論の斬新さを提示するばかりではなく、18 世紀の自然科学と文化史との関連をも明らかにし、18 世紀後半の同時代史の断面を現出させるのを目指している。

3. 研究の方法

(1) 「自然科学と文化史のデータベース」と「ノンフィクションとフィクションの間テクスト性」という2つの大きな領域に関する文献資料の収集と精読、および日独の研究者とも絶えずコンタクトをとりながら、本研究への助言をもらい受けることが中心であった。

おもに指導をあおいだのは、研究代表者の博士論文の *Betreuer* であった早稲田大学文学学術院の大久保進名誉教授、ベルリン・フンボルト大学哲学部ドイツ文化研究所の *Hartmut Böhme* 教授であった。

啓蒙主義時代の自然科学に関する資料は、個別テーマが複数ゆえにかなり時間がかかることを見越して、計画的に収集しなければならなかった。これまでいくつかの論文等の作成を通じて、すでにある程度は収集してあるが、そのような資料についても、研究成果にさらなる奥行きをもたせるために、18世紀の文献にあたって、もう一度あらためて収集することもあった。

そのさい、日本では、大阪大学文学部および早稲田大学の図書館で所蔵されているドイツ文学のマイクロフィルム・コレクション *Bibliothek der Deutschen Literatur* の閲覧・複写によって、18世紀のドイツ紀行文学の原典資料を補完することができた。

(2) 海外での資料収集および調査を、以下のとおりおこなった。

- ・2009年度夏季休暇：オランダのハーグ、ドイツのゲッティンゲン、キール、オイティーン
- ・2009年度春季休暇：ドイツのベルリン、ヘアフォード、デトモルト、ボン
- ・2010年度夏季休暇：イギリスのロンドン、ドイツのゲッティンゲン、ブラウンシュヴァイク
- ・2011年度夏季休暇：ドイツのゲッティンゲン
- ・2011年度冬季休暇：ドイツのゲッティンゲン

4. 研究成果

(1) 3年の研究期間で取り組んできたゲオルク・フォルスター『世界周航記』論を単著としてドイツの出版社で無事に上梓することができた。このテクストを、いわば当時の「自然科学と文化史のデータベース」として、その一方で同時に「文学テクスト」として分析するという両面から分析した論考である。

(2) 『世界周航記』に関する研究は、ドイツ本国においても、それほど多くはないために、そのテクスト研究史に少なからず寄与できたこと、さらに副次的ではあるが、カンパーの著作の訳書もはじめて日本で出版できたことは、本研究課題の成果として一定以上の意義をもつと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 森 貴史、古代エジプトのキリスト教伝道者たち —コプト教の聖人をめぐって—、*Semawy Menu*、査読無、Vol.3、2012、pp.31-46.
- ② 森 貴史、「つまづきの石」シュトルパーシュタイン ナチスの犠牲者たちの小さな記念碑、EU と日本 「あかねさす」国際文化交流、査読有、2012、pp.62-92.
- ③ 森 貴史、ブラウンシュヴァイクにおけるオイレンシュピーゲルとムメの伝説 —民衆本と食文化と都市の歴史をめぐって—、東西学術研究所創立六十周年記念論集、査読無、2011、pp.265-280.
- ④ 森 貴史、ジェームズ・クックとタヒチの金星観測 —天文学を航海術に実用化する実験をめぐって—、規則的、変則的、偶然的 大久保進先生古希記念論文集、査読無、2011、pp.493-518.
- ⑤ 森 貴史、宇宙と植物のシンボリズムと樹木信仰 〈世界樹〉のイメージをめぐって、*Semawy Menu*、査読無、Vol.2、2010、pp.75-90.
- ⑥ 森 貴史、ハワイのマカヒキ祭とクックの死、異界が口を開けるとき 来訪神のこ

- スモロジー、査読有、2010、pp.225-254.
- ⑦ 森 貴史、追讎における鬼、異界が口を開けるときの 来訪神のコスモロジー、査読有、2010、pp.65-95.
- ⑧ 森 貴史、ミンとプリアポス - 農耕と豊穰の神について -、Semawy Menu、査読無、Vol.1、2009、pp.77-92.

[学会発表] (計 4 件)

- ① 森 貴史、古代オリエントの自然信仰と古代ギリシアの学問体系、関西大学先端科学技術推進機構 平成 22 年度合同研究部門別発表会、2010.11.5、関西大学 100 周年記念会館
- ② 森 貴史、愛の女神ヴィーナス神話と古代の植物信仰、朝日カルチャーセンター朝日 JTB・交流文化塾、2010.5.29、朝日カルチャーセンター芦屋
- ③ 森 貴史、ミンとプリアポス - 農耕と豊穰の神について -、関西大学文化財保存修復研究拠点 第 1 回国際シンポジウム、2009.11.21、関西大学第 3 学舎
- ④ 森 貴史、中澤務、関西大学文学部における初年次教育の実情と問題点、初年次教育学会第 2 回大会、2009.9.19、関西国際大学尼崎キャンパス

[図書] (計 3 件)

- ① 森 貴史、関西大学出版部、カンパーの顔面角理論、2012、199
- ② Takashi Mori、Rombach Verlag、Klassifizierung der Welt: Georg Forsters *Reise um die Welt*、2011、209
- ③ 森 貴史、他、明石書店、ヨーロッパ・ジェンダー文化論 女神信仰・社会風・結婚観の軌跡、2011、285

[その他]

ホームページ等

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~t110065/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 貴史 (MORI TAKASHI)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：1 0 3 1 8 7 4 3